３月総評　　西躰　かずよし

先月は新人賞、奨学生の締め切り月ということもあり、駆け込みの投稿が多くあったためか、投稿数はかなりの数にのぼったが、今月はその影響もあって、その数自体は少なくなったように思う。そのため佳作数も少なくなったが、作品の水準自体は変わっていない。印象に残った作品をあげる。

ぽぽぽぽぽ
春は一気に
やってくる　　桜咲（千葉県）

「ぽぽぽぽぽ」というオノマトペが効いている。いっせいに春が来る様子や、その楽しさがありありと伝わってくる。

通路脇ベンチ菓子パン食べる夜
品川駅とひとつになれる　　石井鉛（東京都）

最後の「品川駅とひとつになれる」というフレーズで、ただの日常の一コマでしかなかった夜が、この世界とつながる唯一の儀式のような夜へと変容する。

ドーナツの穴を取ってと泣く子供　　長谷川柊香（宮城県）

ドーナツの穴を取ってと思うのは子どもだからなのだろうか。それとも大人だからこそその情景に惹かれるかれるのだろうか。

囀りのいつかは夜が見えないよ　　大橋　弘典（群馬県）

「囀りのいつか」とはなんだろうか。ある種の予感のようでもあり、悲劇の前触れのようでもある。そして来たるべき悲劇は「夜が見えないよ」という呟きにおいて成立する。

朝靄にかくれる青い住宅街
だきしめられた腰がしびれる　　白野（新潟県）

敢えて書かれたような「だきしめられた腰がしびれる」という直接的な一節からは、青春

の痛みのようなものが伝わってくる。同じ作者に「推しが死ぬ世界に生きてる推しが／死ぬ世界に生きてる推しが死ぬ／世界」という作品もあるが、叩きつけるようなフレーズには同様の痛みが感じられる。

雷鳴の夜に臓器を抱え行く　　まちりこ（埼玉県）

「雷鳴の夜に」というドラマチックな一節を置くことで「臓器を抱え行く」というたじろぐような表現もまた説得力のあるものとなる。

売ったはずの
家に帰る
夢を見る　　南風（東京都）

事実以外は何も書いていないように見えるが、だからこそ読み手の胸に迫るという見本のような作品である。